

「信じてやろう」

もしも、自分が真実しか話して来なかったのに、周りから「おまえは嘘つきだ」「真実だと証明して見せろ」と言われたら、どんな気持ちになるでしょうか。しかも、説明や弁明さえしてはならないと言われたら。あるいは、説明するほどに疑わしさが増し、弁明するほどに自己保身の印象が強くなるために、そうした発言を全て飲み込まないといけない、となったなら。

私達が、十字架の苦しみという時、その苦しみとは、おもに釘で打ち付けられた手や足の痛み、脇腹を刺された痛みだと思うかも知れません。または、逮捕されたという屈辱、弟子たちに裏切られ、逃げられたという悲しみも、十字架の苦しみの一部だと言えます。ただ、今日の聖書箇所に着目して考えてみますと、十字架の苦しみを生み出した大きな要因の中には、真実を真実だと言えない悔しさ、大きな正義のために目の前の正しさを差し控えなければならない不条理、というものがあると思います。

ヘブライ人への手紙を始め、聖書にはイエス様が、私たち人間と、何ら変わらない感受性を持っていると書かれています。私たちが痛いと感じることは、イエス様も痛いと感じられ、私たちがつらいと感じることは、イエス様もつらいと感じられる。ゲッセマネの祈りで「この杯を取り除けて欲しい」と祈られたイエス様は、本当に苦悶したのだろうし、最後「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びは、本心から出たのだと、少なくとも私はそう考えます。悲しさ、悔しさ、虚しさ、情けなさ。そういう負の感情をイエス様は、すべて知っておられ、すべてお引き受けになる方であります。だからこそ、私たちは、イエス様なら分かってくださると信じて、共感して頂けることを期待して、祈ることができるわけです。

であるならば、今日の聖書箇所における、イエス様の心模様は、どんな様子だったのでしょうか。

26 節「罪状書きには『ユダヤ人の王』と書いてあった」。これは、ユダヤ人やローマ人による、痛烈な皮肉ですね。十字架に付けられた、力も信頼も失った犯罪人に対して、「王」である、と。その大き過ぎる差異、ギャップから生まれる面白味を、そこに集まっていたユダヤ人やローマ人たちは楽しみ、笑ったわけです。そして、「おやおや」なんていう、意外なことに会った際に用いる感動詞まで発して、わざとらしく、嘲笑気味に「十字架から降りて自分を救ってみろ」と言う。さらに言葉をかぶせて「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい」と言う。非常に残念で、つらいのは、こうした侮辱の言葉や、「ユダヤ人の王」という罪状書きは、どれも、ある意味、正しいということです。「イエスは、奇跡で怪我や病気を治せたんだって、だったら、自分を救えばいいじゃないか」「イエスは、波を鎮めて嵐を止めたんだって、じゃあ、ここでも、そんな凄いことをして見せればいいじゃないか」と、群衆が思う気持ちも分からないでもない。「前に、何々したんだから、今、あれして、こうして、そうすればいいじゃないか」と、周りの人間が注文を付け、あげつらう。その乱暴な様子は、現在でも時折、世間を賑わす炎上騒動とも繋がるような気がします。2000 年前から、力を失った者に対する、力無い者たちの暴言は賑やかだったと言えるでしょう。

そんな言葉の暴力が吹きすさぶ渦中であって、イエス様のお気持ちは、どうだったのでしょうか。説明したい、弁明したい、説得したい、という思いが多少はあったんじゃないかと私は考えます。

「あの時は、こうでああで」「でも、今はああだから、こうしてて」と、言いたかったかも知れない、しかし、もしも、ここでイエス様の口から、言い訳の御言葉が発せられていたら、私たちは、その御言葉を、どう受け止めたのでしょうか。この箇所において、イエス様が、舌も滑らかに御自分の正しさを主張されたら、私たちは、その主張を、どう聞いたのでしょうか。・・・この箇所におい

て、イエス様は、一言も反論していません。沈黙したまま、罵詈雑言を受け取っておられます。もしかしたら、この箇所において、イエス様の正しい御言葉を抑えつけているのは、私たちなのかも知れません。イエス様は、人の心をよくご存じです。力を失った者が、たとえ正しい主張だとしても、その主張を声高に訴える様は、人の心に好ましくない、という。だから、イエス様は、この時、きっと多くの正しい御言葉を飲み込んだのだと思います。自らのおかれた状況と、そこに集まる群衆の思いと、そして、それらを読む私たちの心情とを慮り、イエス様は、沈黙を選択された。そして、その選択を強いたのは、十字架上で自己保身とも取られかねない訴えを叫ばれるイエス様を見たくない、という私たちの思いなのかも知れません。

私達は、神様の御前において、イエス様の下で、謙虚に見えるようで、時々、不躰な言動をとることがあります。十字架上でイエス様のお姿に対して、理想像を求める、ということも、そうかも知れません。また、今日の聖書箇所に関連することとして「信じてやろう」という思いが、私たちの中にも、少なからずあるでしょう。神様に対して、イエス様に対して、「あなたが、こうしてくれたら、私は信じます」という条件付けを行うこと。「神様だから、これくらい叶えて欲しい」「イエス様なら、こうしてくれるはずだ」と。ふと油断すると、私たちは「御心の通りになりますように」という基本姿勢を崩してしまうことがあります。

今日は、キリスト教の暦では、棕櫚の主日と呼ばれています。エルサレムに入場されるイエス様を見て、多くの群衆が、棕櫚やオリーブの葉を振り、ホサナ、つまり「主よ、どうか救ってください」と歌って歓迎した出来事があった日です。基本的に、棕櫚の主日は、良き日です。イエス様のことを心から歓迎し、歌って賛美した日なわけですから。しかし、その「歌って賛美した」群衆の心の中にあつた願いは、神様の御心と一致してはなかった。同じじゃなかった。群衆は、御心ではなく、自分の願いをイエス様に向けて押し付けて、勝手に賛美し、勝手に喜んでいたので。そし

て、いざ自分の願い通りの「王」ではないと分かった時に、彼らは「ユダヤ人の王」という罪状書きを、イエス様に付けることを認めたわけです。イエス様を十字架に付けた人々は、自らの中に、あるべきキリスト像、メシア像、救世主の理想形を持っていたのです。そして、その理想をイエス様に押し付けた。「今すぐに十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」という暴言は、何も特別じゃありません。「十字架から降りる方こそ、王であり、救世主である」という認識があったわけです。「王とは、救世主とは、こうあるべきだ」という勝手な思いが、優先されていたということです。

そう考えてみますと、私たちの心の中にも、様々な勝手な思いがあります。「神様がいるのに、どうして」とか「イエス様をご一緒なのに、なんで」とか。その深くて大きな御計画を知りもせず、目に映るところだけを評価して、神様やイエス様に文句を言う、そんな私たちがいます。自分の中にある理想や願いを優先して、それが叶うかどうかだけを基準に据え、「その通りになったら、神様のことを信じてても良いかも知れない」と考えてしまうこともあります。「信じてやろう」という一言は、神を神としない、救世主を自分のもとに置こうとする、私たちの傲慢さの、一つの顕れだと言えるでしょう。

しかし、その傲慢な言葉さえ、イエス様は、受け取られたのです。否定されなかった。そして、「十字架から降りて命長らえる」という、頑張れば、ただの人間にだって出来そうなことを大きく超えて、御復活という奇跡が起こるわけです。「信じてやろう」という小さな暴言に対して、御復活という大きな御業で応えられるのが、神様の御心であり、また、イエス様の救世主としての、真の王としての権威であるということです。十字架に付けられて、言いたいこと、訴えたいことが沢山あったと思われるのに、すべてを飲み込み、沈黙を貫いて、イエス様は、私たちの信仰を守ってくださった。私たちが捨てるに捨てられない疑い惑う気持ちを、すべて受け取られた上で、イエス

様は十字架に掛かり、そして、復活された。その一つ一つに感謝し、人の業を大きく超えた出来事と振る舞いを賛美することを、この1週間、心に留めて参りたいと思います。十字架に至る最後の1週間、受難週が始まります。イエス様が私たちのために耐え忍ばれた多くの苦痛を憶えて、御復活を喜び祝うことの心備えをして参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、心から感謝致します。あなたは、私たちの思いを大きく超えて、この世を導かれ、私たちの人生を整えてくださいます。その振る舞いは、時に私たちの目には不思議に映り、あなたの御心に対して疑いや戸惑いを憶えることを、正直に告白を致します。しかし、私たちは、なおあなたを信じて、今日も祈りを合わせています。主の十字架という、人には全く想像もできないような方法で、私たちの罪を覆い、明日を生きる希望を与えてくださる、そんなあなたを見上げつつ、私たちは、今日から始まる1週間も歩いて参ります。あなたへの信頼と信仰を新たにす、そんな歩みを為していくことができますように。どうか、私たちの全身全霊を守り、支え、導いてください。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。